

第一高等学校へ進んだ茂吉は文学に親しみ、最終学年(明治三十七年)に正岡子規まさおかしきの『竹の里歌』を読んで、日常生活にもとづく写実主義に感銘を受け、これを機にその精神を基本として、作歌活動を本格的に行うようになります。

その一方医学を学ばなければならない茂吉は、明治三十八年(一九〇五)東京帝国大学医科大学進学を前に、養父の考えで次女輝子の婿養子むこやうしとして入籍します。しかし大学在学中、子規系の伊藤左千夫いとうさちおに入門してからは、短歌雑誌「アララギ」の中心的存在として歌人の道を積極的に歩み続けます。

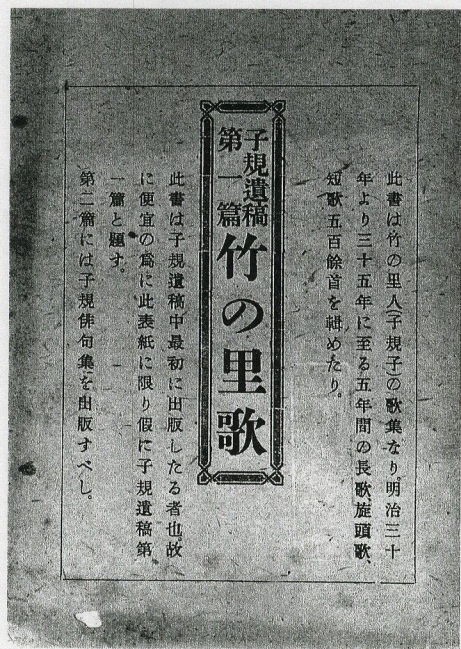
その後、生母いく、左千夫の相つぐ悲報などを契機に、深いかなしみを込めた多くのすぐれた歌が生まれ、その連作歌「死にたまふ母」「悲報来」などを収めた初の歌集『赤光』あかひかりを大正二年(一九一三)に発刊しました。この歌集により無名に近かった茂吉の名は、一躍高められました。



正岡子規(本名:常規)  
慶応3年(1867)~明治35年(1902)

故郷ふるさとの地図をば眺めつくづくと  
灯の下に泣く夜もありけり

「短歌拾遺」



『竹の里歌』明治37年11月13日発刊  
正岡子規が年代順に和歌などを書きとめていた稿本「竹の里歌」をもとに、伊藤左千夫たちがまとめた遺稿集